

女子教育に
身を捧げた

順正女学校の発展

新校舎建設は福西志計子の長年の夢で、一生をかけての大事業であった。彼女は一貫して校長とはならず、校長は高木虎三郎牧師、寺沢精一牧師を経て、明治26年以降、裏内鉦一郎町長が務めた。頼久寺町14番地に土地を得て、裁縫科と文学科の教室を備えた新校舎が明治28年(1895)3月に起工され、11月完成した。早速、向町の校舎から移転して授業が始まり、翌29年3月28日、盛大な移転式が行われ、4月からは寄宿舎の工事が始まり、9月には竣工した。志計子はその玄関前に立ち、「どうしてこれが出来たのでしょうか。全く不思議でありません。実に神様の御恵みと人様の情けです」と、感謝と歓喜に満たされて涙を流した(伊吹岩五郎談)。

福西志計子

第5回

文 児玉 享さん

化、糖尿病と言われていたが、のち肺を病み、30年1月から岡山で、5月からは児島の田之口で、各2カ月間養生をした。このため河合久を招き、福西の代りに学校経営、裁縫教師および舎監を担ってもらった。彼女は1期生で、神戸英和学校(現神戸女学院)に進学、卒業後その教師をしていた人である。福西は高梁に帰ると、教えたり、病床にいたりした。

のち明治31年11月より30余年にわたる順正女学校の校長として発展に尽くした伊吹岩五郎は「福西志計子は時代の生みたる女性であります。世人に対するところは男性的ですが、一面女性としての美点を持っています」と述べている。キリスト教の愛の心と人に対する優しさを強く持っていて、家庭では母と夫に愛を以って仕えている。子どもにも恵まれなかったため、御前町の塩田虎男の次男庸徳を養嗣子に迎え、別に門田家より栄子を養女にして、2人を結婚させて福西家の後継ぎとして



いる。福西は高梁教会員として、留岡幸助を同志社に送り、山室軍平を助けている。石井十次の妻品子は順正女学校で学び、留岡幸助の最初の妻、夏は苦学生として順正で働きながら学んだ。後妻になったきくも苦学生として病人の看病の仕事をし、時に福西の看護もし、彼女の苦心談も聞き、子どものように愛され、労わられた。クリスマスチャンとなった後、「1カ月5銭の教会費に困ると、わざわざ髪を掃除させて、出して貰った」という。

この間、福西の心の中の思いは唯一つ、順正女学校の発展の願いのみで、彼女を訪ねる卒業生や生徒に告げる言葉は「順正女学校の成立の歴史を忘れるな。身を過って学校の名を辱しめる

な」ということであつた。

明治31年になるとほとんど病床で過ごすことになり、伊吹岩五郎牧師は終わりの3カ月間、毎日のように病床に見舞い、励ました。学校の将来を思い焦燥感に悩んでいた福西に、伊吹は新約聖書、第二コリント12章9節を示された。

主は「わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ」と言われました。福西は「私のなすだけは為した。後は神様の働きがあります。何も憂うことはありません」と言い、以後の先生は精神的に別人でしたと伊吹は語っている。

福西志計子は明治31年(1898)8月21日、午後7時半、家族・門下生、多数見守るなか、平安で満ち足りた顔で、波乱の一生を生ききって、52歳で地上生涯を閉じた。共に働いた木村静は後を追うように、33年2月11日64歳で天に召され、2人は同じ教会墓地に静かに眠っている。

(終わり)